

平成 31 年 4 月 15 日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880008

氏名 松井 隆明

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先: 都市名 ハノーバー (国名 米国)
2. 研究課題名 (和文) : 様相に関する現象学的研究: フッサールの本質論の再検討
3. 派遣期間: 平成 30 年 4 月 6 日 ~ 平成 31 年 3 月 18 日 ( 347 日間)
4. 受入機関名・部局名: Dartmouth College, The Philosophy Department
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の研究課題は、「様相的知識 (可能性や必然性に関する知識) はいかにして獲得されるのか」という問いに対する現象学的なアプローチを展開するために、フッサールによる本質の認識論や他の哲学者による関連する議論を検討することであった。派遣先では、「様相的な知識は、経験において私たちが暗黙のうちに従っている規範を反省することを通じて獲得される」というアイデアがフッサールの中に見出されるという作業仮説の下で、受入教授である Amie Thomasson 教授の「様相規範主義」という立場や、Thomasson 教授が参照する Robert Brandom 教授の「様相に関するカント・セラーズテーゼ」、さらに Robert Brandom 教授が参照する Wilfrid Sellars の 1958 年の古典的論文 “Counterfactuals, Dispositions, and the Causal Modalities” の検討を中心に行った。検討の結果、これらの立場は、様相的知識の認識論や様相的事実の存在論に関して、様相実在論のような競合する立場よりも見込みがありそうだという見通しをえた。また、ある種の自然主義的な世界観と親和的であることも明らかになった。以上に加えてさらに、「哲学的知識というものが存在するならばそれは様相的知識である」という想定の下で、哲学的知識というものは存在するのか、もし存在するとしたらそれはどのように獲得されるのか、哲学の課題はそもそも知識の獲得なのか/であるべきなのか、といった問いにも取り組んだ。これらの問題に取り組む中で、「仮に哲学的知識というものが存在しなかったとしても、「よりよい概念を作る」という課題が哲学に残されている」というオプションは有望であるという見通しを得た。この見通しを吟味するために、「概念工学」という新興分野のサーベイを行った。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の研究成果のひとつとして、哲学には様相的知識の獲得以外にも「よりよい概念を作る」という課題があると考えられることが明らかになった。これを受けて、よりよい概念を作るとはそもそもどういうことなのか、それはどのようにして可能なのかといった問題に対して、推論主義という言語哲学上の立場からアプローチした。この成果は、2019年4月8～10日にウィーン大学で開催されたワークショップ The Social Institution of Norms: A Workshop with Robert Brandom において “Inferentialism and Conceptual Engineering: A Sellarsian Approach” というタイトルで発表することが派遣期間中に決定した。また、セントアンドリュース大学の哲学研究センター Arché の招待を受け、4月12日に開催された CE セミナーにおいて同じタイトルの発表を行うことも派遣期間中に決定した。この成果は、発表時に得たフィードバックを踏まえて改稿した上で、海外の哲学系ジャーナルに投稿する予定である。また関連するテーマとして、新しい概念を受け入れることの「正当化」の問題にもすでに取り組み始めており、派遣期間中に第一稿を書き上げた。この成果についても学会・研究会等で発表した上で、海外のジャーナルに投稿したいと考えている。また、当初の研究課題であった様相への現象学的なアプローチについても、フッサールとセラーズの様相論の比較作業を継続して行っており、この成果も学会・研究会等で発表した上で、海外のジャーナルに投稿したいと考えている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

一年間米国に滞在し、トライアンドエラーを繰り返すなかで、幅広い人脈と自信を得ることができた。

カリフォルニアで開催された学会では、私の発表後、かねてから憧れだったある教授がわざわざ私のところまでやってきて、次のような声をかけてくれた。「面白い発表だったし、基本的に同意する。君の草稿ならいつでもコメントするので遠慮なく送ってくれていいよ」。以来、私は原稿を書く度にその教授に送りコメントをいただいている。

学会に参加するだけでなく、他大学の教授に直接連絡をとり、研究室を訪問したりもした。研究室を訪問した教授たちとはその後もメールで継続的に議論をしている。また、研究室訪問が機縁となり、オンラインのリーディンググループに参加させてもらえるようになったりもした。

その他にも、採用期間中に上で挙げたワークショップに採択されたり、招待講演のオファーをいただいたり、面識のない方から研究について問い合わせをいただいたりし、自信を深めることができた。

米国のチャレンジやエンカレッジの文化に触れられたことも良い経験だった。米国には新しいことへの挑戦を高く評価し励ますという風潮がある。こうした風潮のおかげで、日本にいたら絶対に取り組まなかったであろうようなチャレンジングな課題に取り組むことができた。また、米国には褒めるのが上手な人が多い。私は、褒められるのが嬉しくて、例年の倍以上のペースで原稿を書くことができた。私は今後、日本でもこのチャレンジやエンカレッジの文化を育てていきたいと思っている。